

## 第7回考古天文学会議（2023年12月24日）

### 「アイヌ民族の星空の世界」レジュメ

天文民俗班 今野 利秋（アジアの星物語プロジェクト）

古屋 昌美（アジアの星物語プロジェクト）

#### 1. はじめにーアイヌ民族の星の文化と末岡外美夫氏

##### （1）アジアの星物語プロジェクト

日本国内において広く一般的に知られている星の文化にまつわる事例は、西洋、それもギリシャ神話に由来する神話と星座であり、星の名前である。しかし世界を広く見渡してみると、各地の民族、或いは部族ごとに固有の“星の文化”が存在しているという事実がある。日本国内でも例外ではない。アイヌ民族による“アイヌの星”、古くから日本に伝わる“和の星”、そして琉球王朝や八重山地方にて育まれてきた“沖縄の星”といった多様な星の文化が存在している。国内におけるこうした星の文化の存在は、残念ながらその文化が展開している当の日本において広く認知されているとは言い難い。

私たち天文民俗班は、「アジアの星物語プロジェクト」の流れを汲んだメンバーで構成されている。このプロジェクトは、元国立天文台台長の故海部宣男氏が2008年に、「日本でもアジア各国でも、プラネタリウムや学校・家庭で語られている星の物語は、ほぼギリシャ・ローマ神話です。アジア諸国には豊かな星の神話や伝説が伝わっているはずなのに、それらは語られることが少なく、ほとんど知られていないのではないのでしょうか？ 私は、アジア地域に伝わる宇宙や星にまつわる神話・伝説を私たちが協力して収集し、美しい本にまとめて英語で世界に発信してはどうか。またそれをアジア各国語に翻訳し直して、それぞれの地域で出版してはどうかと思っています。来年は世界天文年です。この機会に、アジアの星物語をアジアにも世界にも広める共同プロジェクトを立ち上げませんか？」（日本天文学会『天文月報』2014年8月号、p437）と呼びかけたことに由来する。呼びかけに賛同した国内外の関係者が2009年に三鷹の国立天文台に集まってワークショップを開催。そこから、各地の星の物語を一冊の本とする計画がスタートする。日本では2014年2月、日本語版の『アジアの星物語』として出版された。その流れは、日本国内の星の和名や星にまつわる伝承、民俗的な行事、信仰、寺社仏閣、天文史跡等を幅広く網羅した日本独自版の書籍の出版計画へとつながる。同書は現在、執筆と編集が鋭意行われているところである。天文民俗班のメンバー全員が、このプロジェクトに関わっている人間である。

『アジアの星物語』には、アジア13の国と地域の68話が収録されている。その中で日本に関するものは、「サマエンの星ーアイヌ神話の北斗七星」「徳蔵と北極星物語」「むりかぶしゆんたー沖縄地方の伝説」「七夕さまと瓜畑ー七月七日の伝説」「天岩戸に隠れたアマテ

ラス」「イワンノチュウー六つ星」「船人たちの星歌（沖縄『おもろ草紙』より）」「七夕祭り」の8話ある。「サマエン」と「イワンノチュウ」の2つが“アイヌの星”、「徳蔵」「七夕さま」「天岩戸」「七夕祭り」の4つが“和の星”、「むりかぶしゆんた」「船人たち」が“沖縄の星”という内訳になる。今回の研究対象である“アイヌの星”の引用元となったのは、末岡外美夫の手による著書である。

## （2）末岡外美夫氏という存在

末岡外美夫氏は現在、“アイヌの星”を語るときに欠くことのできない業績を残した人物である。1931年、旭川市に生まれ、旭川中央国民学校で義務教育を修了。福山航空機乗員養成所六期生となり、海軍上等飛行曹として戦地に赴き終戦を迎える。その後、旭川中学（現旭川東高校）を卒業後に小中高大学の教員及び（財）日本私学教育研究所専任研究員を経て諸外国を遍歴された。日本大学助教授、カリフォルニア大学講師、マサチューセッツ工科大学非常勤講師の職に就かれたこともある。（※末岡氏の著書と新聞連載の経歴より作成）

末岡氏がアイヌ民族の星の文化調査を始めたきっかけとして、元旭川市立天文台長の堂本義雄氏が「昭和二十五年夏、旭川市常盤公園に開催された「北海道開発大博覧会」に特設館として設置された「アイヌ民族資料館」で、折から天文台を訪問された小森幸正氏、天文台建設に来旭中の小島修介氏それに著者等と共に、アイヌ人の資料を前にして、「アイヌ民族の見た星の事を調査できれば、興味深いものがあるはずだが。」という話が出たのが、きっかけのように記憶している」と振り返っている（末岡外美夫『アイヌの星』旭川叢書第12巻、旭川振興公社、1979年、p3）。

## （3）末岡氏の著作物

現在、確認できている末岡氏の著作物は発表年代順に以下のとおりである。★マークは内容を確認済みのものである。他の著作物の存在をご存じの方は、情報をお寄せいただきたい。

- ①「アイヌ人と星」（『旭川天文研究会 天文図報3号』）、1951年
- ②「惑星の旧愛乃名」（『THE SKY 7号』）、1954年 ★
- ③『北方の神話と星』A・オルト、佐藤昭一（共著）、1955年
- ④「日食に因むアイヌの伝説」（『北海タイムス』）、1958年
- ⑤「アイヌ民話と星」（『日本大学第二高等学校研究 集録4』）、1962年
- ⑥『アイヌの星』旭川振興公社、1979年 ★
- ⑦「北の星」（『北海道新聞』上川版）、1982年9月～1983年7月 ★  
※「秋」「冬」「春」「夏」編をそれぞれ20回、計80回連載
- ⑧『人間達（アイヌタリ）のみた星座と伝承』末岡由喜江、2009年 ★

#### (4) 末岡氏の業績の波及

##### 1) 野尻抱影氏を介した一般への普及

末岡氏は星の和名の収集・研究で知られる野尻抱影氏に調査研究の成果を送っており、野尻氏が著書の中で“アイヌの星”として紹介をしている。それ以前にも“アイヌの星”について書かれている書籍類はあったが、専門書や論文、或いは江戸時代の書籍等であり、一般に普及される類のものとは言えなかった。影響力の強い野尻氏の著書を介することで、“アイヌの星”の存在が先行事例と合わせて、より広く星の愛好家レベルにも認知されたとと言える。末岡氏による野尻氏への情報提供の意義は大きい。

##### 2) 天文普及現場での活用

アイヌ民族の星の文化が紹介される際、末岡氏の著書からの引用がほとんどである。星にまつわる書籍を出している出版業界、テレビ番組で紹介をする放送業界、イベントや講演などのテーマとして扱う博物館やカルチャーセンターなどの教育・生涯学習分野が主な事例として挙げられる。加えて、とりわけ事例が多いのがプラネタリウム業界である。

プラネタリウムでは季節の星空を解説したり、星にまつわる神話や民話について話をしたりすることが多い。日本では西洋由来、特にギリシャ神話が語られることが多いと先述したが、アイヌ民族の星の文化について触れられることは皆無ではない。解説員の言葉による星空解説、或いは番組、関連する講演や展示等でアイヌ民族の星の文化について語られる。プラネタリウムでの事例は最近増えてきており、具体的な事例は後述する。

##### 3) 様々な媒体での露出

プラネタリウム同様に、ここ数年、テレビや雑誌等でアイヌ民族の星の文化が紹介される事例が増えてきている。NHK は“アイヌの星”と“八重山の星”を紹介した番組を放送。その北海道内ローカル版では、内容を“アイヌの星”に限定して、末岡氏自身にもより深くスポットを当てていた。天文雑誌での連載も進行しているし、道央のニセコ町ではアイヌ民族の星の文化に関連した朗読イベント、標津町では人類学的な見地からの移動プラネタリウムが行われたりしている。海外に目を転じれば、スミソニアン博物館での光害をテーマにした展示で、アイヌ民族の星にまつわる神話が映像化された事例もある。この時、引用元となっているのも末岡氏の著書なのである。詳細については後述する。

## 2. 末岡氏の著作に向かうにあたって

末岡氏の著書や業績は、アイヌ民族の星文化を語るときに欠かせぬものである。現在、発刊・放送・投映されている二次的著作物は、基本的に『アイヌの星』や『人間達（アイヌタリ）のみた星座と伝承』（以降『アイヌタリ』）に記載されている事例を参考・引用しており、

結果的に、末岡氏による見解や意見等も色濃く反映されたものとなる。また、「アイヌ民族の星の文化はこうである」と、末岡氏の見解をもって、アイヌ民族の星の文化のすべてであるような紹介されることもある。しかし、末岡氏の著作に向かう際には、少なくとも以下のような点に注意する必要がある。

#### (1) アイヌ民族の星の文化の地域性

末岡氏は同時代の古老を訪ね歩いて道内各地を歩き、話を聞いて星の記憶を記録した。しかし、当然ながらそれは道内のすべてのエリアではない。北海道は広大であり、暮らしている土地の気候や風土を反映した地域差があり、ひとくくりにして述べることができない多様性を持っている。星の文化も同様であることは末岡氏も十分認識されていた。『アイヌの星』と『アイヌタリ』でも、一つの星の名前に対して異なる呼び方が異なる地域で存在している事例も紹介されている。採集した地域が記載されている。こうした地域性を無視して、ある地域の事例をもって、「アイヌ民族の星の文化では、このように呼ばれている」、と紹介するのは危険である。少なくとも事例が複数ある場合には、「この地域ではこのように呼ばれていて、他の地域でも異なった呼び方がある」事を注釈するのが望ましいであろう。

#### (2) 末岡氏の選別のフィルター

末岡氏が採集した事例すべてを収録しているわけではない、という事実にも注意すべきである。末岡氏は、ある事例を採集した人だけでなく、その血縁者など、その事例を知っている人物を複数人求めている。かつ、他の地域での採集結果を照らし合わせたりするなどのチェックを経て、確実性・信頼性が高いもののみを選別して掲載している。このことは、『アイヌの星』p328、『アイヌタリ』の目次前にある「本書を読まれる方に」に明記されている。末岡氏が出会えていない事例ももちろん多数あろう。加えて、選別の過程でふるい落とされたものも存在していることは、頭にとどめておくべきである。当然のことであるが、「記載がない事」と「星の文化がない事」はイコールではないのである。

収録されなかった星の文化の事例は、末岡氏のノートやカードに記載されていると、著書の中にかかっている。『アイヌタリ』を発行された奥様の由喜江氏に確認したところ、「以前はそういった類のものはあったが、故人となった今では所在が分からない」とのことであった。ふるい落とされた事例が、時を経た現在の視点で眺めれば価値のある貴重なものである可能性は十分にあり、一次資料としての末岡氏のノートやカードが不明となったのは大変に残念である。ただ、『アイヌタリ』の原稿は残っているとのことなので、その推敲やメモなどの記載から何かしら読み取ることができるかもしれない。可能であれば、札幌にある末岡氏のご自宅に奥様を訪ねたい。

### (3) 末岡氏の掲載基準の変化

末岡氏は、確度や信頼性を慎重に検証した結果として、採集した事例を掲載する際の基準となる数段階のレベルを設けている。『アイヌの星』では、原則として、確度の高い順に上から 2 番目のレベルまでの星を紹介している。そして、捨てるには惜しいという注釈の元に、3、4 番目のレベルの事例からいくつかを最後の章で紹介している。しかし『アイヌタリ』では、上から 3 番目のレベルの星もメインの項目の星として特に注釈無く収録されている。時を経る間に基準が緩くなっているように見受けられるが、その理由は不明である。『アイヌの星』が「筆者の意に添わない出版物として世に出た」と『アイヌタリ』のはしがきで述べていることから、不本意であったものを見直した結果というだけのことかもしれないが、二冊を比較するとダブルスタンダードのように見えるのが気になる所である。

### (4) 末岡氏の理解や訳の妥当性

採集された事例は、当然、末岡氏の中でアイヌ語から和人の言葉への置き換えが行われているが、末岡氏はアイヌ語の専門家ではない。訳の正しさや聞き取りについての理解の精度の検証も必要である。多摩六都科学館のプラネタリウム解説員によれば、アイヌ語の専門家に監修をしてもらうと、末岡氏の訳が時に正確性を欠いていることがあり、「著書にはこう書かれているが、こういう風に訳するのがより妥当である」という注釈をそえて解説をされているとのことである。また、プラネタリウム番組の制作に関わりスミソニアン博物館の展示映像の制作にも関わられた国立アイヌ民族博物館の学芸員の方も、「末岡氏独自の解釈が紛れ込んでいたり、採集された地域と他の地域との混同も見受けられたりすることもある」とおっしゃっていた。末岡氏の著書の訳の妥当性については一度、一般的に専門家の目で判断をしてもらう必要がある。

## 3. 「跡を継ぐもの」の不在

アイヌ民族の星の文化の紹介や活用事例が近年増えており、その元となっているのが末岡氏の著書である事は先述した。どの事例においても末岡氏が引用元となるという事は、それだけ彼の業績の大きさを物語っている。しかし同時に、末岡氏に続く研究者と手に取ることのできる形での成果物が存在していないことの裏返しであるともいえる。事実、末岡氏に続くアイヌ民族の星の文化について調査研究をする専門家が、現状では不在なのである。

アマチュアでアイヌ民俗の星の文化を研究し普及されている方、プラネタリウムで紹介をされている科学館の職員などはいても、末岡氏の著書からの引用が中心である。先述の国立アイヌ民族博物館の学芸員の方も、やはりその知見は末岡氏の業績に負うところが多い。私たち天文民俗班には、星の和名を訪ねて各地を廻っている北尾浩一氏がおり、アイヌの

方々に聞き取りをされたこともある。しかし、ご本人がおっしゃられていることではあるが、アイヌ民族の星の文化の専門家ではない。

この専門家の不在によって生み出されている状況がある。『アイヌタリ』が出版されたのは2009年ではあるが脱稿は1980年である。これ以降、アイヌ民族の生きた星の文化の収集が系統立てて行われていない。北海道教育委員会などの民俗的な調査によって、星の文化に関連する事項が聞き取られて記録されてはいるが、各報告書に散在してしまっている。

『アイヌタリ』以降の調査結果等が、広く一般の人が接しやすい形でまとまっていないのである。この40年余のアイヌ民族の星の文化についての記憶と記録が、広く一般に普及する機会を失って埋もれてしまっているのは非常に惜しむべきことである。

#### 4. 天文民俗班が目指すところ

末岡氏の著作物に記された星の名前や伝承は、同時代を生きた道内各地での古老からの聞き取りによるものが中心ではあるが、その時点での過去の事例については文献からの引用である。末岡氏によると、17世紀（寛永年間？）の『松前の言一糸そことはの事』の「里（り）いこ ほしの事」というのが、アイヌ語の星を意味する単語が初めて和人の書物に掲載された事例であろうとしている（『アイヌタリ』p104）。『アイヌタリ』が脱稿された1980年は『松前の言』に始まるアイヌ民族の星の文化調査研究史において、一つの集大成が行われた年と言える。この年以降、専門家の手による継続した星の文化の収集が行われておらず、民俗的な調査研究の成果に含まれる星の文化に関連する記載が散在しており、それが問題点であるということは先述した。そこで天文民俗班では、空白の40年余りを可能な限り埋めていくために、散在している事例をできるだけ発掘すること、それらから得られた事例と末岡氏の著書の事例をすべて一覧化・マッピング化し、末岡氏の業績を今一度再構築・再評価することにつなげていこうと思う。

##### (1) 末岡氏の「ビフォー」「アフター」からの再発掘

まず、1980年以前の「ビフォー」と以降の「アフター」という二つの時期にアイヌ民族の星の文化調査研究史を分けて考え、それぞれの時代の研究の成果や文献類を今一度整理する。

##### 1) 「ビフォー」

この時期の調査研究に関しては、『アイヌの星』と『アイヌタリ』の二冊と、二冊の本本文中で引用されたり、参考文献として記載されたりしている文献類を基本資料として考える。二冊に掲載されている文献類は、別紙1としてまとめた全213点である。ここには『アイヌタリ』と北海道新聞の連載が含まれていないので、加えれば総数215点とな

る。現時点では文献の一覧の作成を行った段階である。今後は、できるだけ末岡氏の著作物の一次資料としてこれらにあたり、星や天体に関する記載を拾い上げ、最終的には一覧としてまとめる所存である。そして、2 - (2) で述べた末岡氏のフィルターをできるだけ外して、著作物に未記載の事例が発掘できればと思う。また、資料の中には、アイヌ民族の暮らしや民俗、和人との関わりなどの説明のために引用・参考文献とされたものもあるので、最終的には資料の種類分類も行えればと思う。1 - (3) に記載した、末岡氏の手による著作物にあたるのは必須であると考えている。

「ビフォー」の中で一つの試みとして考えているのは、現存のアイヌ語辞典(明治・大正期に採取してるもの中心に)から星など天体に関連する単語を抜き出し、それらを末岡氏の著書内に記録のある星名や国立民族博物館アイヌ語アーカイブと照会することである。採集者が天文知識を持ち合わせていないため、実際にどの星を指す言葉なのか同定できないまま挙げられているものも少なくなく、「星」そのものを指す言葉だけでも多岐にわたる事例などが見受けられるためである。現時点で『北海道あいぬ方言語彙集成 東北海道編(吉田巖・小学館)』『アイヌ語方言辞典(服部四郎編・岩波書店)』の抜出しが終了しているが、この2点だけでも末岡本に記述のない星名や検証のできない星名があることが見受けられる。アイヌ語方言辞典に関しては、道内及び樺太・千島もあわせ10か所の方言が記述されているため、他の辞書と合わせて調査を進めていくことで地域による差異や変化も検証していくことができると考えられる。辞典に挙げられた語彙の検証はおそらくこれまで行われていないと思われる。

215点の資料の一部は、国会図書館などのデータベースでヒットしないものもあるが、末岡氏の蔵書としてご自宅に存在する可能性がある。『アイヌタリ』の原稿の確認と合わせて、できれば末岡氏のご自宅を調査目的で訪問をしたいと考える。

## 2) 「アフター」

散在している資料を図書館やインターネット等から情報を収集するという手探りの状態で進めて、リストを作成している途中である。発掘した文献類の中には、「ビフォー」時代の成果からの引用など旧知の事例もある。一方で、「ビフォー」の時期に刊行されているにもかかわらず、末岡氏の215点に含まれていないものも存在する。末岡氏が意図的に外したのか、或いは存在を知らなかったのかは不明である。それらの文献類は、刊行の時期的には「ビフォー」ではあるが、「アフター(末岡氏未記載)」として扱う。

最終的には、「アフター」に出された星の文化の記載がある文献類と、抜き出した記載を一覧化する。さらに、それらの記載が既知のものか、末岡さんの著作物に記載・未記載であるかどうか、まったく事例のない記載であるのかという分析と分類も行っていく

現段階の調査で尽力しているのは、北海道教育委員会によるアイヌ民族の民俗文化調査報告書のシリーズである。最初の報告書の刊行は1968年であり、1975年の報告書は末岡氏も参考文献としている。しかし、大半が「アフター」の調査・刊行であり、そこに

は星の文化についての記載を確認できている。このシリーズは現在も毎年刊行されて総数が200冊余りあり、鋭意中身にあたっているところである。

## (2) 得られた事例のマッピング

得られた事例は、末岡氏の著書の再構築の意味合いもかねて、記載・未記載のものをすべて一覧化するが、その際、①星や星座・天体ごと、②地域ごと、の二つの分類は最低限行っていく。①はアイヌ民族の星空の見方を考察する際の材料として有益なインデックスとなろう。②に関しては、アイヌ民族の星の文化の地域性を考えていく上で有益となる。最終的にはGoogleマップ上にマッピングして可視化することを試みる。アイヌ文化の地域性と重ね合わせて、星の文化の地域性や分布を考えていくうえで非常に有益だからである。

特に辞書からの単語の抜き出し事例は、一つの天体を示す言葉の地域差、つまり「方言」を検証するうえでも有益であると考え。事実、「星」を示す単語がわかっているだけでも4、5種類あるし、同じ星や星の並びであっても、地方で呼び名が異なる事例がある。こうした地域別の分布が直感的にわかりやすくなると期待される。

## (3) 合わせて臨みたいこと

### 1) 神話や伝承の整理

『アイヌの星』と『アイヌタリ』を見て気づくのは、掲載されている星や天体についての神話や伝承類に限られているということである。これらの分野は、民話や神話のジャンルとして、更科源蔵氏の著書や『日本昔話通観』（稲田浩二・小沢俊夫編、同朋舎出版、1989年）等に散在している。これらの事例も極力リストアップができればと思う。アイヌ民族の世界観や宇宙観を考える場合、これらの情報も揃っていることで総合的に考えることができるからである。

### 2) 世界観や宇宙観の事例研究

抽出した事例から、アイヌ民族の世界観や宇宙観を推察していくことも視野に入れている。具体的には以下の二つである。

- ・日食や月食の際の祈りや踊りやあるいは神話を通じて、太陽や月という存在についての認識、月と太陽との関係についての認識を考える。
- ・道内には星が落ちたことや輝いていることを示すアイヌ語地名が数か所あり、伝承もある。可能であれば現地を訪ね、ランドスケープ、認知的な側面から考える。天文民俗班では国内の隕石や星が落ちた伝承の調査も考えており、そちらと連動していく。

## 5. おわりに

「アフター」の事例や資料の調査はまだ緒に就いたばかりである。アイヌ民族の星の文化が記載されている資料や活用事例について情報をお持ちの方はご連絡を頂きたい。書籍・インターネット・展示・パンフレット等、ソースの形態は問わずに広く募りたい。また、天文民俗班の取り組みには研究会参加の皆様の知見によるご意見やご助力が欠かせない。ぜひ、ご協力を賜りたいと考えている。

あわせて、道内の博物館等で研究されている方による現地での聞き取りや研究・調査報告の事例の掘り起こしへの協力が得られると大変ありがたい。そうした方々とのコネクションがある場合には、連携をとっていきたい。

以上